



TITLE:

生きたヤクシマダカラ(前鰓類, タカラガイ科)の貝殻に付着したウミサカヅキガヤ科(ヒドロ虫類, 有鞘目)の群体

AUTHOR(S):

久保田, 信; 土生, 紳吾

CITATION:

久保田, 信 ...[et al]. 生きたヤクシマダカラ(前鰓類, タカラガイ科)の貝殻に付着したウミサカヅキガヤ科(ヒドロ虫類, 有鞘目)の群体. 南紀生物 2001, 43(1): 23-24

ISSUE DATE:

2001-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/188284>

RIGHT:

© 南紀生物同好会

南紀生物, 43(1): 23-24, 2001

生きたヤクシマダカラ（前鰓類，タカラガイ科）の貝殻に付着した ウミサカヅキガヤ科（ヒドロ虫類，有鞘目）の群体

久保田 信*・土生 紳吾**

Shin KUBOTA and Shingo HABU: Campanulariid colony (Hydrozoa, Thecata) attached to the shell of living *Cypraea (Mauritia) arabica asiatica* (Prosobranchia, Cypraeidae)

ヤクシマダカラ *Cypraea (Mauritia) arabica asiatica* (SCHILDER & SCHILDER, 1939) は、熱帯インド・西太平洋に分布する比較的大形に成長するタカラガイ類の一種 (奥谷, 2000) で、分布の北限に近い和歌山県下において、特に西牟婁郡白浜町沿岸では、潮間帯や浅海で多数の個体が普通に見られる。今回、初めて、生きたヤクシマダカラ（殻長 63 mm の成貝）にヒドロポリプの群体が肉眼で容易に確認できるほど付着繁茂している（図 1）希少例を磯で発見したので報告する。

採集年月日 2000年 5 月 5 日
採集場所 和歌山市西牟婁郡白浜町椿の岩礁海岸
採集状況 本個体の発見現場は、巨岩の積み重なった洞窟状の場所で、干潮時に土生は腰をかかめて中へ入っていくことができた。洞窟の海底には、直径 50 cm くらいの石が多数積み重なっており、本個体は、

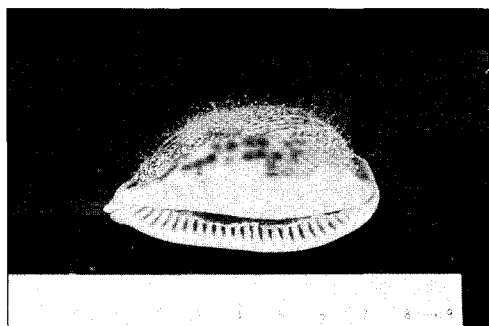


図 1 ヤクシマダカラ（和歌山県白浜町産）生貝の貝殻に付着したウミサカヅキガヤ科の群体

Fig. 1. Campanulariid colony attached to the shell of a living *Cypraea (Mauritia) arabica asiatica* collected at Shirahama, Wakayama Prefecture.

低潮線にある 1 個の石の上に静止しており、体全体が完全に海水に浸かっていたが、ヒドロポリプが付着した部分は外套膜で被われていなかった。

ヒドロポリプ *Campanularia* sp. (ヒドロ虫類，有鞘目，ウミサカヅキガヤ科) の群体（生殖体なし），ヒドロ茎は分枝せず高さ 3.1 mm に達す。貝の上面から見て，群体の大半は，貝殻の 45 mm（殻長側）× 35 mm（殻幅側）の面積を占有，共肉部は白色（図 2）

生きたタカラガイ類の貝殻上に付着生物が生育・成長している例は、これまでわが国からはフジツボ類（少なくとも 3 種）や石灰藻が知られていたが（久保田, 1997：表 1 参照；久保田・山口, 1998），本例のようにヒドロポリプの群体が貝殻上部の大部分に繁茂しているものに初めて遭遇した。この個体の採集地点で，採集日に複数のヤクシマダカラの生息を確認したが，ヒドロポリプ類が付着した個体はそれ以外には見られなかった。

本個体は，採集時の様に，外套膜がヒドロポリプの付着した貝殻部分を常に被わないのか不明である。もし，

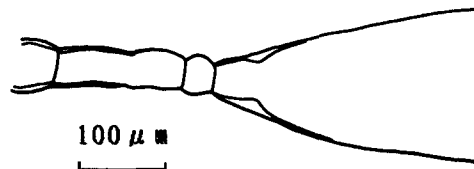


図 2 図 1 に示したウミサカヅキガヤ科の 1 個虫のヒドロ莖とヒドロ茎上部

Fig. 2. Hydrotheca and the upper part of the hydrocaulus of a zooid of the campanulariid hydroid shown in Fig. 1.

* 京都大学大学院理学研究科附属瀬戸臨海実験所（〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町）Seto Marine Biological Laboratory, Graduate School of Science, Kyoto University, Shirahama, Nishimuro, Wakayama 649-2211, Japan

** 〒371-0203 群馬県勢多郡粕川村月田310-3 Tsukita 310-3, Kasukawa, Seta, Gunma 371-0203, Japan

24

この個体が衰弱しているか軟体部に何らかの欠陥などがある場合、付着したヒドロポリプは、刺胞で貝が捕食されるのを防止する（してきた）役割を果たしている（してきた）のかもしれない。この群体が、ただ1個体のプラヌラ幼生の定着から生じたとすると、そのような群体に生育するまでに、最低でも数週間を経過していると推察される。

引用文献

久保田信．1997：貝殻表面にフジツボ類あるいは石灰藻

が付着した生きたハナマルユキダカラガイ（軟体動物門，中腹足目，タカラガイ科）．南紀生物，**39**(2)，125-126．

久保田信・山口寿之．1998：貝殻表面にフジツボ類と石灰藻が着生したハナマルユキダカラガイの生貝（軟体動物門，中腹足目，タカラガイ科）南紀生物，**40**(2)，181．

奥谷喬司編著．2000：日本近海産貝類図鑑．1173 pp.，東海大学出版会，東京．